宮沢賢治と詩碑「人首町」

宮沢賢治第二集「春の修羅」より

「人首町」
雪や雑木にあさひがふり
丘のはざまのいっぽん町は
あさましいほど光ってゐる
そのうしろにはのっそり白い
五輪峠のいたゞきで
南につゞく種山ヶ原のなだらは
渦巻くひかりの霧でいっぱい
つめたい風の合間から
ひばりの声も聞こえてくるし
やどり木のまりには艸いろのもあって
その梢から落ちるように飛ぶ鳥もある

　　水沢へ七里の道が
けさうつくしく凍ってゐて
藻類の行商人や
税務署の濁密係り
みな藍靛の影を引いて
つぎつぎ町を出てくれば
遠い馬橇の鈴もふるえる
〈詩「人首町」の下書き稿より〉

大正13年3月に釜石線鱒沢駅で下車し、五輪峠を越え、上大内沢を経て、人首町に辿り着き、投宿した旅館が○菊慶旅館である。この作品は、翌朝宿や近くにある人首橋周辺から五輪峠方向を見て、その印象を表したものと言われている。
上：段ヶ岡(通称「だんながね」)にある
　　詩碑「人首町」
中：段ヶ岡　赤い鳥居
下：人首町　投宿した「菊慶旅館」が
　　見える。今年リニューアル黄色○
また、この作品には下書き稿(一)と(二)があり、人首町の様子が詳しく記されている。

下○にはハリストス正教会がありました。
昭和８年に焼失したハリストス正教会。

200m先にはカトリック教会。10 年程前に３人のシスターが去り、教会も老朽化し取り壊され。その後地域民と教会が協力し、アンジェラスの鐘の鐘楼を立て直し、夕方５時に鳴らし続けている。明治時代からの鐘の音を、これまで守ってきた中山さんや子供たちのためにも。

宮沢賢治は翌朝新町橋付近を散策し、その様子を下書き稿に記している。

壇ヶ岡は桜の名所でもある。奥には薬師神社がある

種山ヶ原周辺の植物

クサギ（実を染料に使うらしい）
赤いのはガクで、実は丸い（左下）

ヤマナシ　種山ヶ原にはたくさんある。
賢治作品にも「やまなし」がある。子供の頃は晩秋によく食べた。熟れると甘い。

種山ヶ原の麓にはお茶の木もあり、「茶畑」という屋号もある。多分昔お殿様にお茶を献上していたのだろう。現在 6 軒の家でお茶の木を育てている。今、熊谷哲朗さんの畑には白い椿のような小さな花が咲いている。

「種山ヶ原の晩秋」　　胆沢平野に雲海たなびく　早朝

雲海の上に焼石岳が白く神々しい。

11 月 4 日　　駒ケ岳(須川)が見える

11 月 8 日 2 度目の雪に又三郎も寒そう

来年は落葉松の黄金色の道を写真に。

アメダスが朝焼けに

早池峰山も雪で白く、種山ヶ原はもう冬だというのに、雪の中にテントを張る元気な夫婦がいた。枯葉も落ち、枯野にツルウメモドキが際立って見える。